様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２８１６

研究課題名（和文）分散形態論の批判的検証：日本語オノマトペの述語化と英語の転換に着目して

研究課題名（英文）Verification of Distributed Morphology: With Special Reference to Japanese Onomatopoetic Predicates and English Conversion

研究代表者
漆原　朗子（Urushibara, Saeko）

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：００２６４９８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　日本語はオノマトペが豊富で、コピュラ「デアル」や軽動詞「スル」を伴い述語として用いられる。そのため「語根には範疇指定がない」とする分散形態論の検証に最適である。
　研究の結果、当該現象は範疇を決定する機能範疇の形態的実現にかかる語彙挿入規則の精緻化によって説明可能であるとの結論に達した。
　成果は日本英語学会2018年第36回大会ワークショップ「形態論から見た統語論・意味論：軽動詞構文、程度表現、オノマトペ」（岸本秀樹・渡辺明・漆原朗子）及び019年第37回大会シンポジウム「統語-音韻インターフェイスに必要な情報の表示をめぐって」（木村博子・成田広樹・多田浩章・渡辺明・漆原朗子）として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　オノマトペはソシュールの「言語記号の恣意性」の反例ともされ、その音韻的側面、および音象徴（Sound Symbolism）の観点からは多くの研究がなされてきた。また、昨今では認知言語学の立場から類像性（iconicity）に関する研究もおこなわれている。
　しかしながら、生成文法の枠組みによる研究はほとんどなかった。本研究では、語根の反復（reduplication）、鋳型による形態論（templatic morphology）などの生成音韻論の概念と手法によってオノマトペの音韻と意味の対応を分析すると共に、派生された語幹の分散形態論の範疇決定機能範疇による述語化という革新的な分析を提示した。

研究成果の概要（英文）：Japanese has abundant onomatopoeia, which can be used as predicates accompanied by the copula 'de a-ru' and the light verb 'su-ru.' Therefore,this phenomenon is the best case for the verification of Distributed Morphology, one of whose main tenet is that roots are not specified with category.
Research led to the conclusion that the phenomenon can be explained by elaborating on Vocabulary Insertion rules relevant for morphological realization of the functional categories which determine the category of the root.
The results were presented in "Syntax and Semantics Viewed from Morphology: Light Verb Constructions, Degree Expressions and Onomatopoeia", Workshop at the 36th Conference, 2018 (Hideki Kishimoto, Akira Watanabe and Saeko Urushibara), and "On the Representation of Information Necessary at Syntax-Phonology Interface", Symposium at the 37th Conference, 2019 (Hiroko Kimura, Hiroki Narita, Hiroaki Tada, Akira Watanabe and Saeko Urushibara), both in English Linguistic Society of Japan.

研究分野：言語学（生成文法）

キーワード：分散形態論　統語論　オノマトペ　コピュラ　形容詞　形容動詞　複雑述語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者である漆原は博士論文（Urushibara(1994):p.7 20）以来、生成文法理論の枠組みで英語・日本語・朝鮮語を中心に形態論および形態統語論の分析を行ってきた。特に、Halle and Marantz (1993)によって最初に定式化された分散形態論（distributed morphology: DM）については、漆原がブランダイズ大学大学院博士課程在籍中の 1992 年度秋学期にマサチューセッツ工科大学において Halle と Marantz による講義を直接受講して以来、DM における文法の各部門の関係やインターフェイス、また、形態論の他のアプローチとの差異に関する経験的証拠について考察を進めてきた。その直接的成果は英語の完了相に用いられる過去分詞の実現における規則動詞と不規則動詞の違いを DM と非形態素形態論（Anderson (1992)）で分析するという提案（科学研究費補助金研究 p. 8①および）である。

また、Urushibara(1994)で具体的に分析した日本語の形容詞類については、その発展が日本語感情形容詞に関する科学研究費補助金研究（p. 8 ②）に結実した。

状態性述語に継続的に関心を抱き、論文・学会報告等を通じて他の研究者に発信（p.7 17、15 など)、有益なコメント等に基づき、展開を進めている。　状態性述語、特に形容詞類の研究は不可避的に相(aspect)・法(modality)の研究にも展開する。そのため、同時進行的に英語の過去分詞に関する研究（科学研究費補助金研究（p. 8 ①)、進行相と完了相に関する英語・東京方言・北部九州方言の比較研究（科学研究費補助金研究（p. 8 ③)）などを行ってきた。さらに、最近は「まい」などの法要素の形態統語的研究も行っている（p. 6　1 、2)。

一方、2000 年代に入り、形容詞類の研究に関する研究が多く出現してきている (Baker(2004)、McNally and Kennedy(2008)、Cinque(2010)など)。　しかしながら、この動向においても、次の 3 点の課題がある。まず、状態述語の意味的研究はそれなりに多く、また、Urushibara(1994)、Nishiyama(1997)など、形態統語論および形態論的アプローチは見られるものの、形態・統語・意味をそれらのインターフェイスも視野に入れた体系的かつ包括的研究は行われていない。

第二に、多くの印欧語では形態的に明示的な繋辞（コピュラ）についても、日本語のそれについての同定は明確にはされていない。生成文法の枠組みでも、1960 年代以来の一連の日本語研究の中で、統語的分析の一環として繋辞の形式が規定されることはあっても（例えば Kitagawa and Ross(1973)の「学生である人」「学生の人」はそれぞれ時制のある繋辞と時制のない繋辞など)、形容詞やいわゆる形容動詞については、Urushibara (1994)、Nishiyama(1997)の提案はあるものの、明確な結論には至っていない。

しかしながら、この動向においても、次の 3 点の課題がある。まず、状態述語の意味的研究はそれなりに多く、また、Urushibara(1994)、Nishiyama(1997)など、形態統語論および形態論的アプローチは見られるものの、形態・統語・意味をそれらのインターフェイスも視野に入れた体系的かつ包括的研究は行われていない。

第二に、多くの印欧語では形態的に明示的な繋辞（コピュラ）についても、日本語のそれについての同定は明確にはされていない。生成文法の枠組みでも、1960 年代以来の一連の日本語研究の中で、統語的分析の一環として繋辞の形式が規定されることはあっても（例えば「学生である人」「学生の人」はそれぞれ時制のある繋辞と時制のない繋辞など)、形容詞やいわゆる形容動詞については、Urushibara(1994)、Nishiyama(1997)の提案はあるものの、明確な結論には至っていない。

２．研究の目的

分散形態論（distributed morphology: DM）の以下の 2 点の主張について、通言語的な事実に鑑みて普遍的な部分と言語個別的な部分を形容詞類の屈折およびオノマトペが種々の述語として用いられる際の形態の分析を通して明らかにする。その際、DM ではあまり明示的には議論されていない英語の変換（conversion）の過程も比較する。

1. Morphology after Syntax：統語構造が組み立てられた後に語彙が挿入される
2. 語根（root）は範疇を持たない：統語構造に挿入される際に次のいずれかの手順により決定
   a. 語根が挿入される統語上の位置（英語など）
   b. 語根に付加する顕在的な要素（日本語など）

３．研究の方法

(1) 文献収集：理論言語学関係図書・国語学・日本語学関係図書
(2) 調査・研究：人間文化研究機構（国立国語研究所）・国立国会図書館等にて資料収集・調査
(3) 研究打ち合わせ：神戸大学・福岡大学
(4) 学会/研究会参加・発表：日本言語学会・日本語文法学会・日本英語学会

４．研究成果

2018 年日本英語学会第 36 回大会
<Workshop Report> *JELS 36*

形態論から見た統語論・意味論：
軽動詞構文、程度表現、オノマトペ*

(Syntax and Semantics from the Morphological Point of View:
Light Verb Construction, Degree Expressions and Onomatopoeia)

漆原　朗子（Saeko Urushibara）
北九州市立大学（University of Kitakyushu）
岸本　秀樹（Hideki Kishimoto）
神戸大学（Kobe University）
渡辺　明（Akira Watanabe）
東京大学（University of Tokyo）

キーワード：軽動詞，程度表現，オノマトペ

0.　はじめに

本ワークショップでは、日本語の軽動詞構文、程度表現、オノマトペを英語などの他言語と比較しながら分析することによって、それぞれについてこれまで一般的に想定されてきた枠組みや分析に一石を投じるような経験的証拠を提示することを試みた。そして、そのことを通して形態論と文法の各部門の関係、とりわけ、辞書部門（the lexicon）の存在と語彙的操作、統語構造と意味の対応などについての理論的帰結を考察した。

1.　（発表 1）軽動詞構文に現れる項の認可について（岸本）

「動名詞+する」の形式を持つ軽動詞構文では軽動詞「する」に（構文に対して実質的な意味を与える）動名詞が組み合わされ、複雑述語のようにふるまう。この軽動詞構文に関しては、軽動詞の「する」がそれ自体では項に与える意味役割を持たないとする Grimshaw and Mester (1988)の考え方と、「する」が項に与える意味役割を持つとする考え方が対立する（後者については Uchida and Nakayama (1993)などを参照)。本論では、軽動詞構文の「する」が意味役割を持つという考え方に対する支持を与える新たな経験的なデータを提示した上で、動名詞と軽動詞が複雑述語を形成するのではなく、軽動詞が動名詞を項にとる構文を形成し、項の意味役割の付与が動名詞と「する」のそれぞれの領域で起こることを示した。さらに、動作主主語構文と非動作主主語構文で「する」の持つことができる項構造が異なることも論じた。特に、動作主構文の主語の意味役割が「する」に由来するのに対して、非動作主主語構文の主語の意味役割は動名詞に由来することを示した。

2　（発表 2）名詞の最上級？（渡辺）

本発表は、「一番」という最上級をあらわす程度修飾表現が名詞に直接結びついているように見える場合の分析として、音形のないサイズ修飾語が構造上存在しており、通常の最上級のように「一番」は名詞ではなくサイズ修飾語の方と結びついていると考えるのが妥当であると提案した。主たる根拠は、当該のパターンが可能な名詞が、「だい」や「おお」の接頭辞、または、「だいの」による修飾を受け入れて程度の意味をあらわす名詞とほぼ重なるという事実である。意味的におおよそ対応すると見られる英語の名詞が *big* による修飾を許しているという、Morzycki (2009) による観察もこれを後押しする。このことに、最上級で補充形態がみられる数少ないパターンにサイズ修飾語が含まれているという Bobaljik (2012) による類型論的知見を加えれば、音形なしの形態も補充法の一種であると理解でき、本提案をさらに補強する材料となる。発表では、最上級以外にも音形のないサイズ修飾語を想定した方がよいと思われる場合を日本語や英語その他でいくつか指摘した。

3.　（発表 3）オノマトペの述語化（漆原）

本発表では分散形態論の枠組みで日本語オノマトペの様々な形態的実現を分析した。
Halle and Marantz (1993)、Embick and Noyer (2007)、等によれば、統語論における終端節点には音形表示のある語根と音形表示を持たない抽象的形態統語素性があり、 語根は範疇を持

たず、範疇は機能範疇によって決定される。オノマトペはその本質から範疇が明確とは言えず、特に日本語はその豊富さと範疇的実現の多様性から DM の主張を検証する事例となる。一方、認知言語学、語彙意味論等でオノマトペの様々な意味的特性が指摘されてきたが、DM の枠組みでは論理形式での解釈にかかわるすべての素性は統語論に存在しなくてはならない。

そこで、オノマトペの韻律的・鋳型的な一般化と生産性を捉えるための道具立てとして、範疇決定にかかわる機能範疇の内部に意味的な素性を仮定し、韻律（例えば Mester and Ito (1989) が提案する口蓋化による liquid 素性の付与（「パタパタ」→「パチャパチャ」）や鋳型（「すっきり」「はっきり」等 cf. McCarthy and Prince (1995) 他）が Spell-Out 後に語彙項目として挿入されると分析し、日本語オノマトペの形態と意味の規則的対応の統語的分析が可能となると提案した。

* 本ワークショップは日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C)「分散形態論の批判的検証：日本語オノマトペの述語化と英語の転換に着目して」(課題番号：17K02816　研究代表者：漆原　朗子　連携研究者：岸本　秀樹・多田　浩章・渡辺　明）の助成を受けたものです。ワークショップ参加者の皆様からの有意義なコメント・ご質問に感謝します。

2019 年日本英語学会第 37 回大会
シンポジウム

「統語–音韻インターフェイスに必要な情報の表示をめぐって」

司会：漆原　朗子（北九州市立大学）
講師：木村　博子（千葉工業大学）
成田　広樹（東海大学）
漆原　朗子（北九州市立大学）
渡辺　明　（東京大学）
ディスカッサント：多田　浩章（福岡大学）

要旨
漆原朗子（北九州市立大学）

極小主義理論は限られた素性の集合、構造を組み立てるための操作である併合、および併合によって生成されたフェイズを音韻・意味部門に送るための転送のみを仮定する。同時に、理論は感覚運動系および概念意味系とのインターフェイスであるスペルアウトにおいて必要十分な情報を保証しなければならない。

しかし、転送に関しては音韻および意味の写像は平行的に収束するのが理想であるが、Chomsky(2013: p.107 および fn.12)も指摘する通り、そこには非対称性が存在する可能性がある。さらに、分散形態論の主張に基づき語彙部門が解体された場合、派生語や複合語など従来は語彙部門における形成と考えられてきた要素も統語論あるいはそれ以降の部門において扱われることとなる。

本シンポジウムでは統語論、音韻論、形態論にかかわる問題について概念的および経験的な観点から議論し、より制限された文法理論のありかたを考える。

（発表 1）
削除が意味解釈に及ぼす影響について
木村　博子（千葉工業大学）
成田　広樹（東海大学）

本発表は、様々な省略構文において削除が意味解釈に与える影響を考察する。例えば、why-stripping((1)参照)や短縮応答((2)参照)等の動詞句や複合語の一部の残留を許す省略構文では、慣用表現としての非構成的解釈は取り難く、構成的解釈のみが可能である。

(1) A:太郎が市長に手をあげた。
　B1:なんで手(を)? B2:なんであげた(の)?
　(手をあげる—構成的解釈：手を上に掲げる；非構成的解釈：殴る、立候補する)
(2) A:あの女優は何作りが得意なの?
　B:役です。
　(役作り—構成的解釈：(ポーカー、麻雀等の)役を作ること；非構成的解釈：演技を工夫すること)

本発表では、当該の非構成的解釈の欠如に対し、「非構成的解釈は、語彙(音韻素性)の後期挿入の結果に基づき辞典(Encyclopedia)部門において決定される」とする分散形態論(Marantz (1996)参照)に依拠した分析を提案する。

Marantz, Alec (1996) “‘Cat’ as a Phrasal Idiom:Consequences of Late Insertion in DistributedMorphology,” ms., MIT.

（発表 2）
複合語の音韻的実現およびオノマトペ述語の意味解釈に必要な情報について
漆原　朗子（北九州市立大学）

動詞由来複合語は連濁において項/付加詞非対称性が観察される。しかし、3 モーラ動詞では「人」を指す場合以外は全て連濁する。

(1) a. 窓ふき/空ぶき
　　b. 魚つり/沖づり
(2) a. 指づかい/魔法つかい/普段づかい
　　b. 金ばらい/露はらい/着ばらい

次に、通常は軽動詞と共に変化を表すオノマトペでも繋辞と共に主語の心理状態を表すことができる。

(3) a. 私は（彼には）がっかり/びっくり/はらはら/どきどきだ。

さらに、2 モーラを完全反復したオノマトペの多くは繋辞と共に状態を表すが、そうでないものは動詞的あるいは副詞的にしか用いられない。

(4) a. がさがさ/*がさごそだ。
　　b. がたがた/*がたごとだ。

分散形態論によってこれらを説明するために、無範疇の語根がいかに述語として実現され、また、統語構造が音韻部門でどのように保持されているのかに関して提案を行う。

（発表 3）
Pred^0
渡辺　明（東京大学）

本発表では、Matushansky (2019) が Pred0 の存在に疑義を呈しているのに対し、英語および日本語の現象の分析を通して、Pred0 の役割を明らかにすることを目標とする。日本語の観点からは、Nishiyama (1999)によって提案されているように「で」が統語構造で Pred0 として働いていることを確認した上で、Pred0 の形態的要請がもたらす帰結を小節について検討する。また、「で」が分裂文にも出現することから、Pred0 が焦点を表示するための投射の主部と密接な関係にあることを論じ、英語の小節が逆転語順の擬似分裂文であることを許すのは Pred0 と Foc0 の類縁性によるものであるという可能性を追究する。Pred0 が Foc0 と類似の範疇であるならば、焦点解釈を強制しないことを明示するという意味的な働きを同定できることも、このあらたな視点から得られる帰結に数えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 漆原　朗子	４．巻 1
２．論文標題 分散形態論による日本語オノマトペの分析	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岸本　秀樹（編）『レキシコン研究の現代的課題』くろしお出版	６．最初と最後の頁 pp．205-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hideki Kishimoto	４．巻 30(3)
２．論文標題 ECM subjects in Japanese.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of East Asian Linguistics	６．最初と最後の頁 pp．　231-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 岸本　秀樹	４．巻 1
２．論文標題 補助動詞構文のV2における文法化：脱範疇化と融合	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岸本　秀樹（編）『レキシコン研究の現代的課題』くろしお出版	６．最初と最後の頁 pp．135-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸本　秀樹	４．巻 1
２．論文標題 統語論と形態論のインターフェイス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中村　浩一郎（編）『統語論と他の分野とのインターフェイス』.開拓社	６．最初と最後の頁 pp．45-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 多田　浩章	4．巻 2
2．論文標題 移動のコピー理論と焦点辞の解釈	5．発行年 2021年
3．雑誌名 高野祐二・岡俊房・浦啓之・多田浩章（編著）『移動現象を巡る諸問題』開拓社	6．最初と最後の頁 pp．211－259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺　明	4．巻 1
2．論文標題 サイズ修飾の形態特性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 岸本　秀樹（編）『レキシコン研究の現代的課題』くろしお出版	6．最初と最後の頁 pp．107-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Saeko Urushibara	4．巻 第35・36合併号（小林道彦教授退職記念号）
2．論文標題 "Nominative-Genitive Conversion Across Time and Space: An Overview"	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『基盤教育センター紀要』	6．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 漆原　朗子・岸本　秀樹・渡辺　明	4．巻 36
2．論文標題 形態論から見た統語論・意味論：軽動詞構文、程度表現、オノマトペ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 JELS	6．最初と最後の頁 237-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Saeko Urushibara	4．巻 vol. 10
2．論文標題 A Note on Velar Nasals: Representation and Derivation in Distributed Morphology	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ICU Working Papers in Linguistics	6．最初と最後の頁 105 - 118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Kishimoto, Hideki	4．巻 1
2．論文標題 Negation	5．発行年 2018年
3．雑誌名 The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics	6．最初と最後の頁 300-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kishimoto, Hideki	4．巻 34(1)
2．論文標題 On the grammaticalization of Japanese verbal negative marker	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6．最初と最後の頁 65-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hideki Kishimoto	4．巻 17
2．論文標題 Negative polarity, A-movement, and clause structure in Japanese	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of East Asian Linguistics	6．最初と最後の頁 109-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　7件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 岸本　秀樹
２．発表標題 「青い目をしている」構文の意味と統語構造について」
３．学会等名 日本語文法学会22回大会 ワークショップ「「する」構文の核と周縁」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hideki Kishimoto
２．発表標題 The syntactic forms of secondary predicates: A view from Japanese
３．学会等名 The International Workshop on Secondary Predication 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Akira Watanabe
２．発表標題 Indeterminate Complex Numerals
３．学会等名 日本英文学会北海道支部第66回大会シンポジアム「不定語研究の展開と展望」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hideki Kishimoto
２．発表標題 V-V compounds and adjunct modification in Japanese
３．学会等名 The 53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea SLE 2020 (online)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 漆原　朗子
２．発表標題 複合語の音韻的実現およびオノマトペ述語の意味解釈に必要な情報
３．学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺　明
２．発表標題 Pred °
３．学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 漆原　朗子
２．発表標題 統語・音韻インターフェイスに必要な情報： 複合語・複雑述語・オノマトペを通した考察
３．学会等名 東洋学園大学言語学コロキアム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 漆原　朗子
２．発表標題 博多方言「バイ」「タイ」の統語的分布と機能の対応
３．学会等名 福岡言語学研究会（語楽会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 岸本　秀樹
２．発表標題 非対格仮説と数量副詞
３．学会等名 日本語誤用と日本語教育研究会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岸本　秀樹
２．発表標題 軽動詞構文に現れる項の認可について
３．学会等名 日本英語学会第36回大会ワークショップ「形態論から見た統語論・意味論：軽動詞構文、程度表現、オノマトペ
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺　明
２．発表標題 名詞の最上級
３．学会等名 日本英語学会第36回大会ワークショップ「形態論から見た統語論・意味論：軽動詞構文、程度表現、オノマトペ
４．発表年 2018年

１．発表者名 漆原　朗子
２．発表標題 オノマトペの述語化
３．学会等名 日本英語学会第36回大会ワークショップ「形態論から見た統語論・意味論：軽動詞構文、程度表現、オノマトペ
４．発表年 2018年

１．発表者名 Watanabe, Akira
２．発表標題 Ordinals, Superlatives, and Linearization
３．学会等名 7th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure, Hokkaido University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岸本　秀樹
２．発表標題 複雑動詞構文におけるＶ２の脱語彙化
３．学会等名 『言語変化・変異研究ユニット』 第５回ワークショップ（於東北大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸本　秀樹
２．発表標題 日本語の節構造と否定極性表現
３．学会等名 ワークショップ：極性表現の構造・意味・機能』（於名古屋学院大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 漆原　朗子
２．発表標題 分散形態論の批判的検証：日本語オノマトペの述語化
３．学会等名 語楽会
４．発表年 2018年

１．発表者名 多田　浩章
２．発表標題 保守性と作用域再構築
３．学会等名 慶應言語学コロッキアム「日本語文法から言語理論へ」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 多田　浩章
２．発表標題 演算子の非保守性と作用域の反再構築
３．学会等名 日本英語学会第35回大会ワークショップ「非顕在的統語操作の発展と拡張」
４．発表年 2017年

１．発表者名 多田　浩章
２．発表標題 作用域の反再構築とG-自明性
３．学会等名 上智大学理論言語学講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroaki Tada
２．発表標題 Anti-Scope Reconstruction and G-Triviality
３．学会等名 南山大学言語学研究センター 第53回コロキュアム（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計14件

1．著者名 岸本 秀樹（編著）	4．発行年 2021年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 233
3．書名 レキシコン研究の現代的課題	

1．著者名 高野祐二・岡俊房・浦啓之・多田浩章（編著）	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 292
3．書名 移動現象を巡る諸問題	

1．著者名 岸本 秀樹	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 240
3．書名 Analyzing Japanese Syntax	

1．著者名 岸本 秀樹（著）由本 陽子、岸本 秀樹（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 316
3．書名 「シンハラ語の名詞修飾節における主語の格標示」『名詞をめぐる諸問題』	

1．著者名 岸本 秀樹・Dileep Chandralal （著）プラシャント パルデシ、堀江 薫（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 584
3．書名 「シンハラ語の名詞修飾表現」『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』	

1．著者名 多田 浩章（著）斎藤 衛、高橋 大厚、瀧田 健介、髙橋 真彦、村杉 恵子（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 320
3．書名 「二重焦点の格助詞脱落とラベル付けについて」『日本語研究から生成文法理論へ』	

1．著者名 漆原 朗子（著）岡部 玲子、矢島 純、窪田 悠介、磯野 達也（編）	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 536
3．書名 「「テアル構文」とその周辺に関する覚書」『言語研究の楽しさと楽しみ』	

1．著者名 岸本　秀樹	4．発行年 2019年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 208
3．書名 「軽動詞構文における意味役割付与のメカニズム」　岸本秀樹（編）　『レキシコンの現代理論とその応用』 pp．99-126	

1．著者名 岸本　秀樹	4．発行年 2019年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 400
3．書名 「日本語の否定極性表現と統語構造」　澤田治・岸本秀樹・今仁生美（編）『極性表現の構造・意味・機能』 pp．50-79	

1．著者名 渡辺　明	4．発行年 2019年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 400
3．書名 程度修飾と極性が交差するところ　澤田治・岸本秀樹・今仁生美（編）『極性表現の構造・意味・機能』 pp．128-152	

1．著者名 岸本　秀樹	4．発行年 2019年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 304
3．書名 「軽動詞構文の移動現象：項上昇と名詞編入」　西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉陽子（編）『言語におけるインターフェイス』 pp．11-24	

1．著者名 Saeko Urushibara	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 384
3．書名 "On the Wordhood of Japanese Complex Predicates" 于一楽、江口清子、木戸康人、眞野美穂（編）『統語構造と語彙の多角的研究－岸本秀樹教授還暦記念論文集』 pp．302-318	

１．著者名 Hideki Kishimoto	４．発行年 2017年
２．出版社 De Gruyter Mouton	５．総ページ数 851
３．書名 "Attributive Modification." The Handbook of Japanese Syntax, pp. 447-495.	

１．著者名 Akira Watanabe	４．発行年 2017年
２．出版社 De Gruyter Mouton	５．総ページ数 851
３．書名 "Attributive Modification." The Handbook of Japanese Syntax, pp. 783-806.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2021年11月、福岡県立小倉高等学校2年生3名が「総合的な学習（探求）の時間」でオノマトペについて研究し、その際インターネット検索で本課題を発見して研究代表者である漆原の所属機関である北九州市立大学に連絡してきた。
Zoomによるオンラインで1時間ほどオノマトペの特徴や音韻と個別言語の関係などについて説明した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	岸本　秀樹 (Kishimoto Hideki) (10234220)	神戸大学・大学院人文学研究科・教授 (14501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	多田　浩章 (Tada Hiroaki) (60258506)	福岡大学・人文学部・准教授 (37111)	
連携研究者	漆原　朗子 (Watanabe Akira) (70265487)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関